

日本周辺クロマグロ調査

松宮隆志・高坂祐樹

調査目的

クロマグロをはじめとする高度回遊性魚類は、商業的価値も高く日本の漁業において不可欠であるにもかかわらず、その生態には不明な点が多い。その原因として最たるものは回遊範囲の広大さが挙げられる。

本調査では、水産庁の統一した手法を用い、本県のまぐろ類主要水揚げ港の水揚げ状況を把握し、まぐろ類の生態を知るための資料を得るものとする。

また、まぐろ漁業において混獲が頻繁にみられ、クロマグロなどと同じく、その生態に不明な点が多いさめ類についても、同様の調査をした。

調査方法

青森県内におけるまぐろ類主要水揚げ港7港を調査対象地区（図1参照）と設定し、六ヶ所・尻労・深浦・岩崎・大間に関しては、昨年と同様に仕切伝票から魚体重を調査した。八戸については、魚種別水揚げ量の集計データから、月ごとの魚種別・漁法別の水揚げ状況を調査した。

また、以前から水揚げ量の多かった三厩地区を、今年から調査対象地区に加え、1991年までさかのぼって魚体重を調査した。

さめ類の調査は、集計データの整っている八戸において、魚種別・漁法別水揚げ量を調査した。

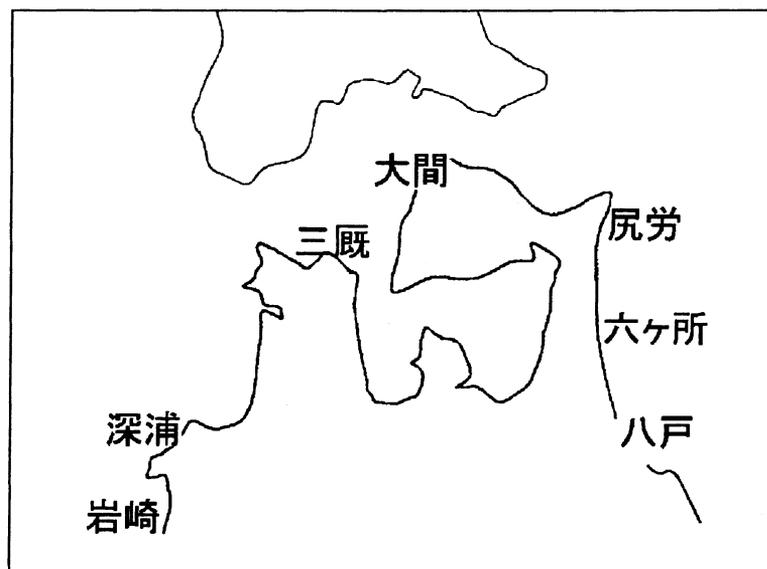


図1. 調査対象地区

調査項目

魚体重調査は原則として1個体単位で、銘柄、水揚げ状態、体重を調査したが、岩崎及び三厩につ

いては、仕切伝票から体重が判明しない場合は推定値とした。

調査結果

<1996年のクロマグロ漁況について>

1992～1996年の、各調査対象地域におけるクロマグロ水揚量経年変化を図2に示した。

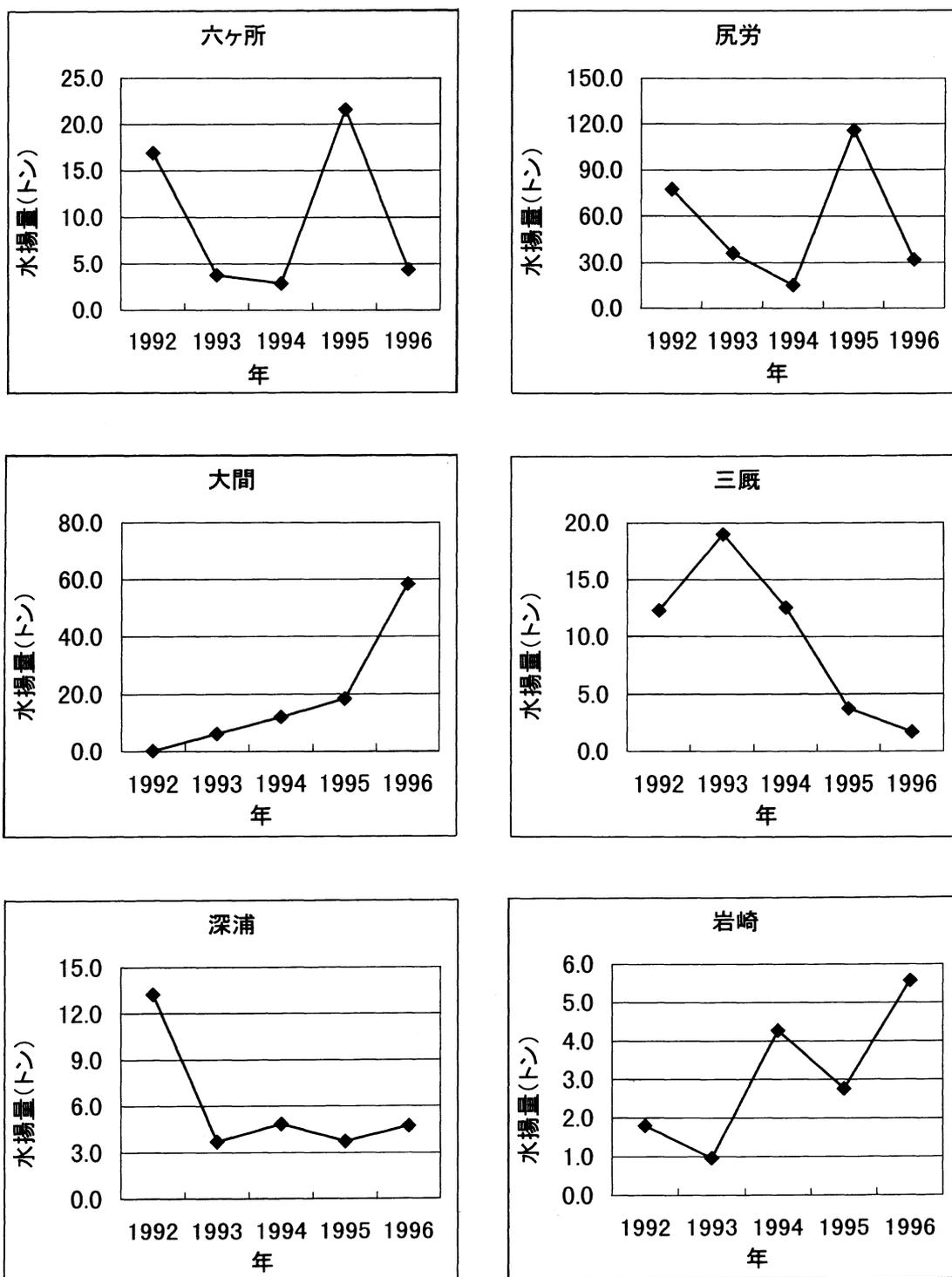


図2-1. 各調査対象地域におけるクロマグロ水揚量経年変化(1992～1996年)

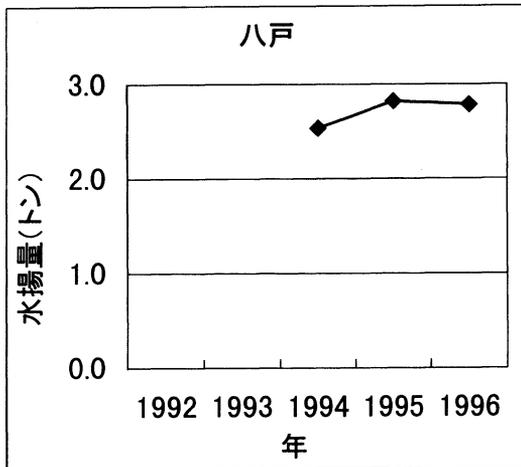


図2-2. 各調査対象地域におけるクロマグロ水揚量経年変化(1992~1996年)

太平洋北部に位置する尻労・六ヶ所では、1995年に大量に水揚げされたメジが、1996年では急激に減少し、水揚量の前年比は、尻労で0.27、六ヶ所で0.20と著しく低下した。

一方、近年急激に水揚量が増加している大間では、1996年も58トン(20kg未満を除く)で、前年比は3.17と大幅に増加した。大間と同様に津軽海峡に位置する三厩では、1993年をピークに水揚量は急減しており、前年比は0.44となった。

日本海側の深浦・岩崎は、太平洋側のようなメジの急減がみられず、前年比は深浦が1.26、岩崎が2.05と増加した。八戸は前年とほぼ同様であった。7市場の合計水揚量は1995年の169トンに対し、1996年は109トンで前年比0.64と減少した。魚体重別の水揚げ尾数をみると、大間を除く各地域では1994年生まれのメジが水揚げの大半を占めていた。ただし、大間についても20kg未満の魚体重・尾数が不明ではあるが、水揚量(表1参照)から判断してメジがかなりの割合を占めていると考えられた。1996年の大間では、1990生まれの卓越年級群と推定される80~100kgと、1992生まれと推定される35~50kgに漁獲の山がみられた。(図3参照)

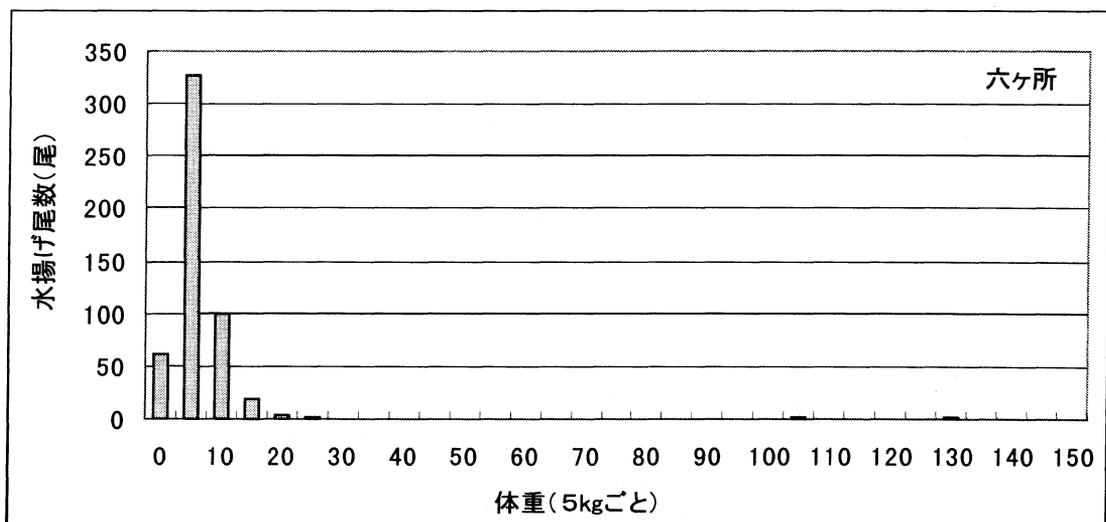


図3-1. 各調査対象地区におけるクロマグロ体重別水揚げ尾数(1996年)

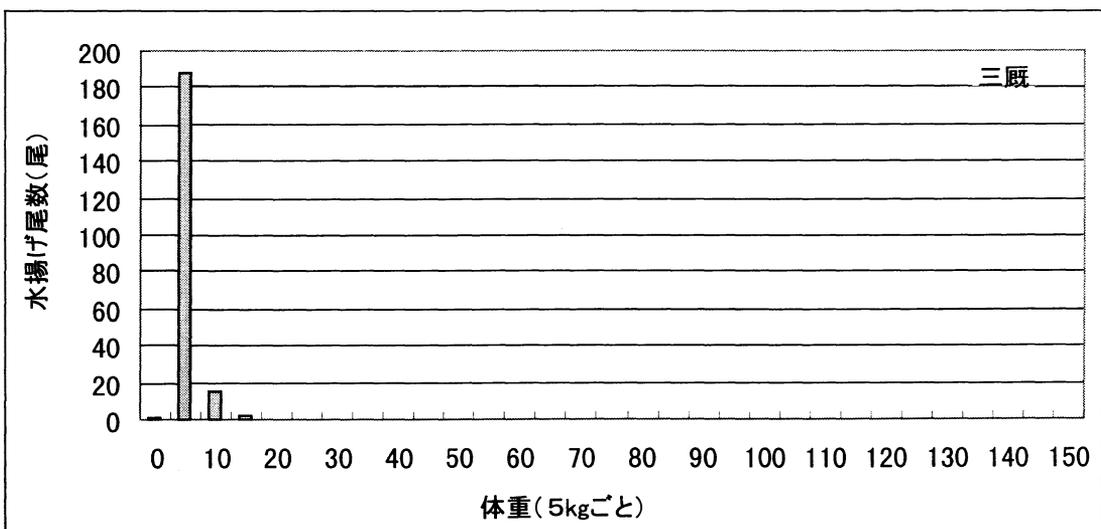
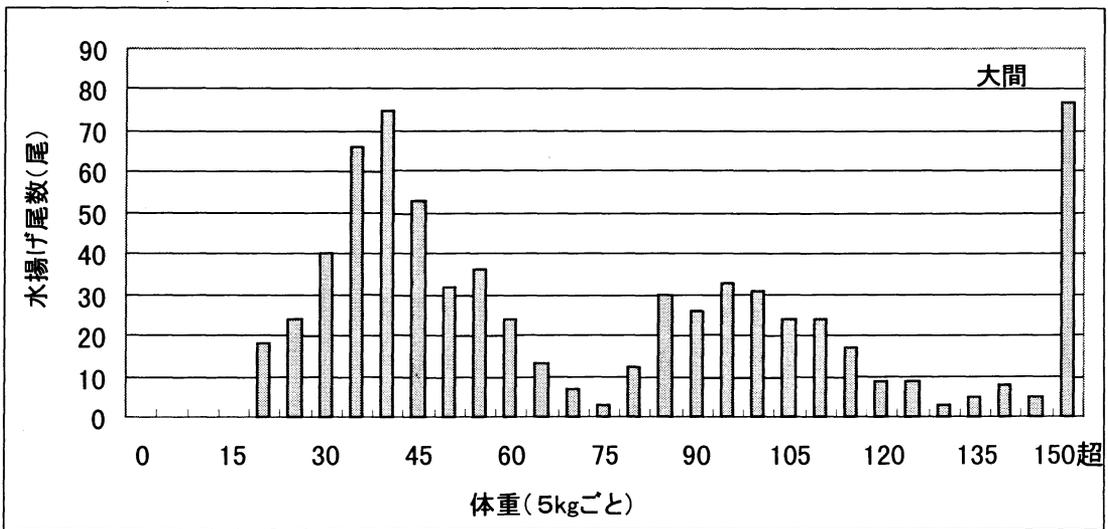
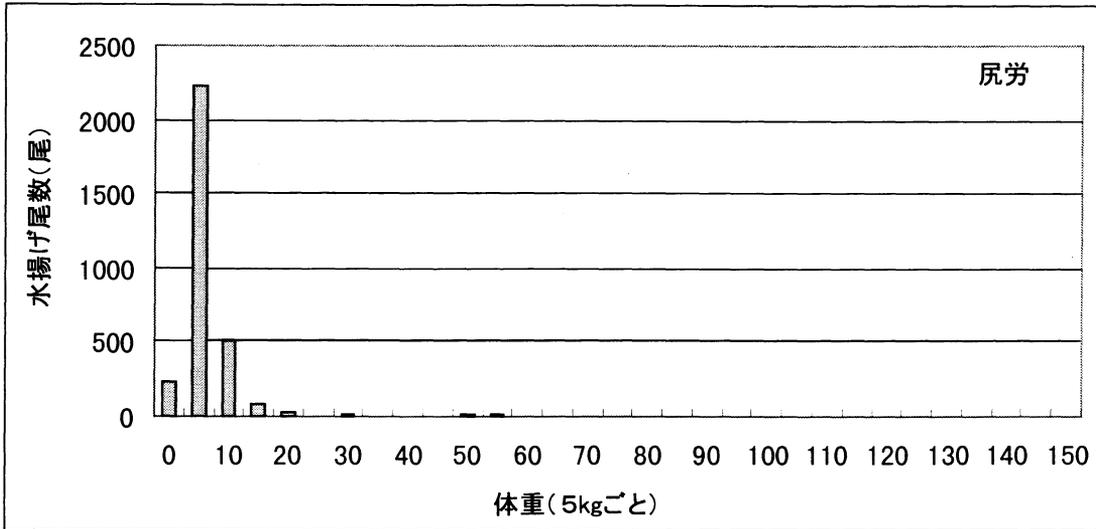


図3-2. 各調査対象地区におけるクロマグロ体重別水揚げ尾数(1996年)

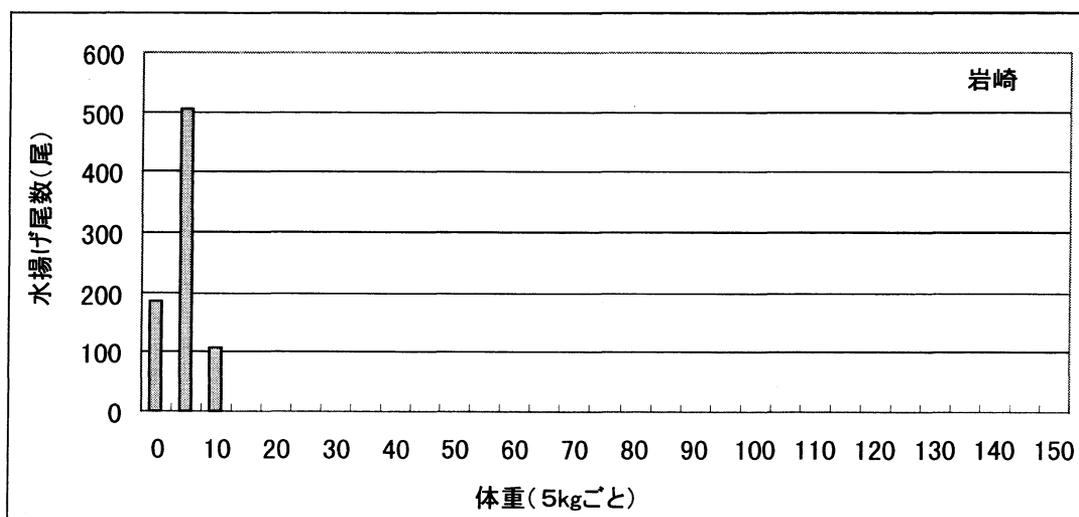
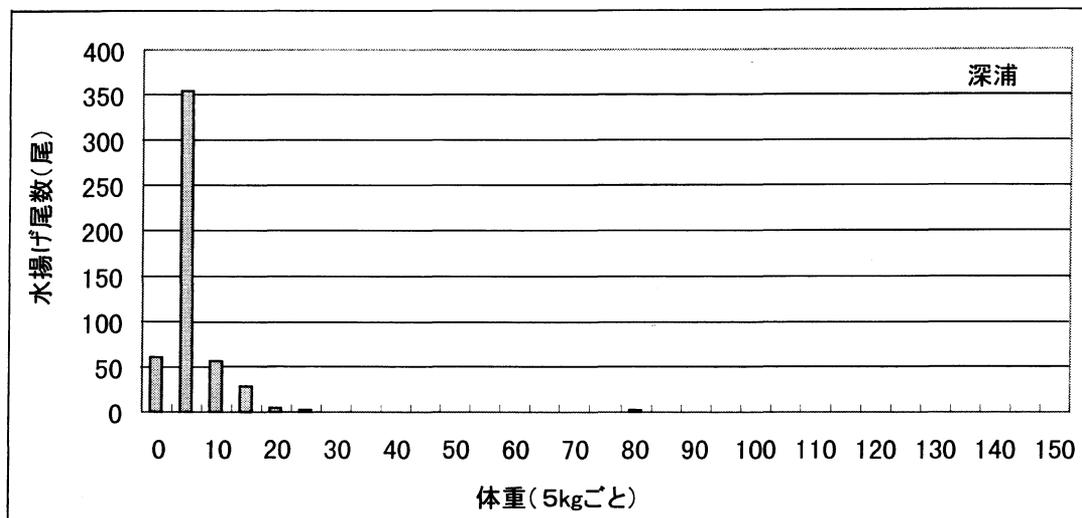


図3-3. 各調査対象地区におけるクロマグロ体重別水揚げ尾数 (1996年)

表1. 1996年大間地区クロマグロ体重階級別水揚量

	20kg以上	20kg未満	全体
8月	1,205.5	1,467.5	2,673.0
9月	13,895.2	6,767.8	20,663.0
10月	17,693.9	19,570.1	37,264.0
11月	15,590.5	16,009.5	31,600.0
12月	9,855.5	5,405.5	15,261.0
合計	58,240.6	49,220.4	107,461.0

<三厩地区におけるクロマグロ水揚げ状況について (1991~1995年)>

1991~1995年の年別クロマグロ体重組成を図4に示した。

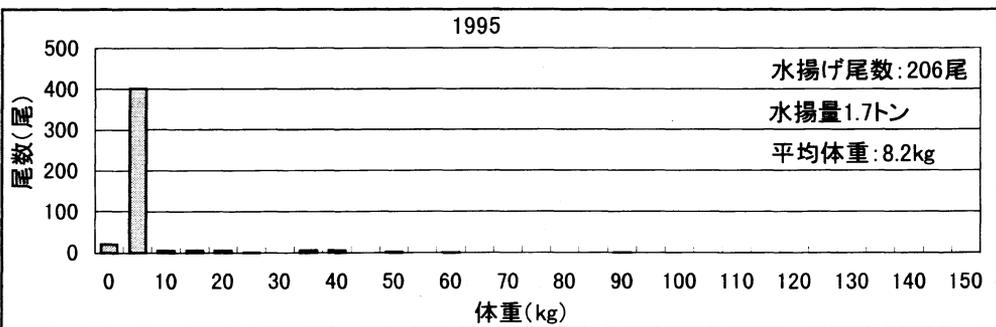
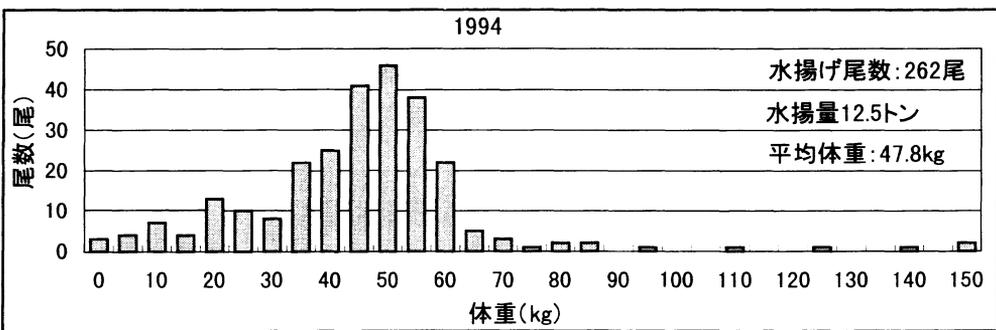
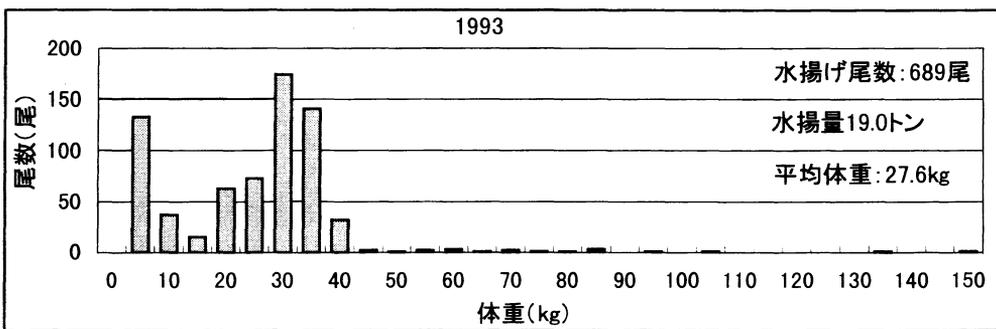
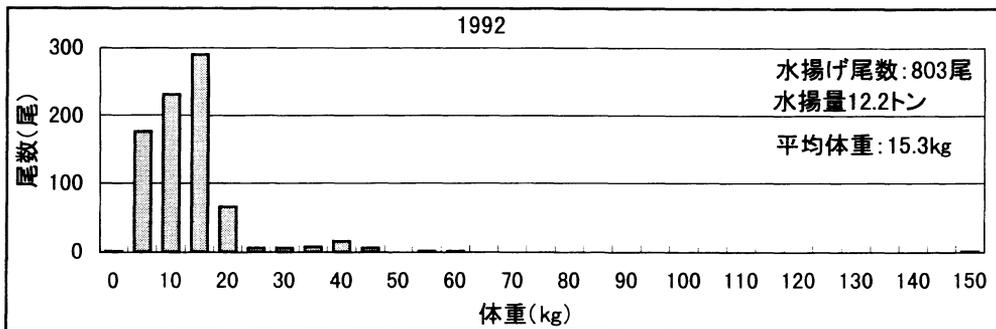
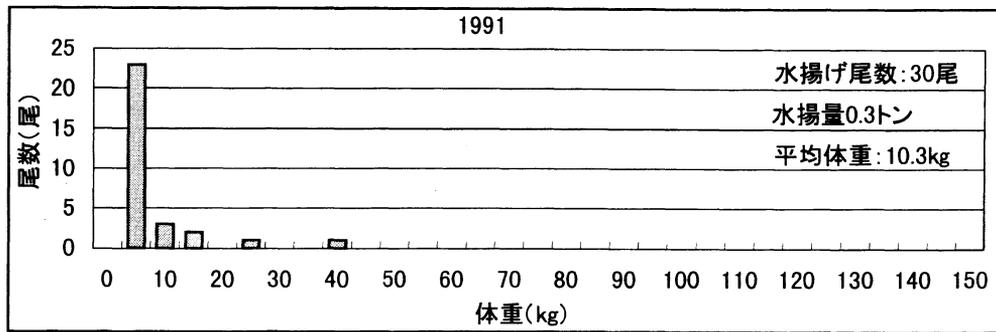


図4. 三厩におけるクロマグロ年別体重組成 (1991~1995年)

三厩のクロマグロの水揚げ状況について、以下のことが分かった。

- ・三厩のクロマグロの主漁期は、10～12月であった。
- ・1991年は漁獲量が極端に少ないが、同じ漁法で水揚げされるネズミザメは大量に漁獲されているため、漁獲努力量が少ないのではなく、1991年の三厩へのクロマグロ来遊量が少なかったものと考えられた。
- ・体重組成から1991～1994年にかけて、主要漁獲対象群の体サイズは、年々大きくなっていることが分かった。
- ・1991～1994年までは、クロマグロ成長式*1から、同一年級群（1990～1991年生まれ）を主に漁獲していることが分かった。しかし、1994年から1995年にかけて平均体重がかなり小さくなっていることから、この年に主要漁獲対象群が1994年発生群に変わったことが窺えた。また、1995年主要漁獲対象群（1990～1991年生まれの卓越年級群）の三厩への来遊量は、1991～1994年の主要漁獲対象群（1994年生まれの卓越年級群）に比べ、少ないことが分かった。しかし、他調査対象地域全般に1994年生まれの卓越年級群は、来遊量が非常に多く、三厩のみが相対的に減少していることが分かった。

<八戸におけるさめ類の調査について（1996年）>

1994～1996年の八戸におけるさめ類の水揚量を表2に示した。1996年のさめ類の水揚量は前年に比べ、アブラツノザメは11%減、ネズミザメは7%増、ホシザメは56%増となった。これら3種について1994～1996までの水揚量の経年変化は図5のようになった。これら3種以外のさめ類の水揚量は皆無であった。

表2. 八戸におけるさめ類の水揚量 (kg)

1994		1995		1996	
アブラツノザメ	311,275	アブラツノザメ	462,351	アブラツノザメ	411,416
ネズミザメ	27,928	ネズミザメ	14,889	ネズミザメ	16,032
ホシザメ	2,480	ホシザメ	4,663	ホシザメ	7,262
ヨシキリザメ	79	その他サメ	10	ヨシキリザメ	30
アオザメ	30				
さめ類計	341,792	さめ類計	481,913	さめ類計	434,740

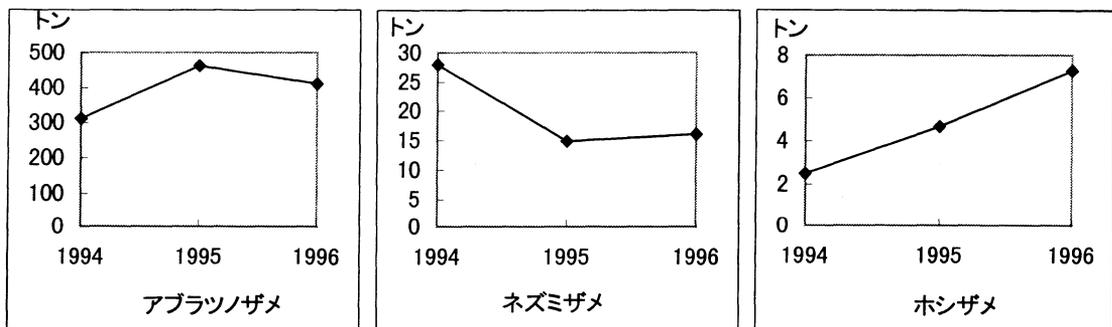


図5. 八戸におけるさめ類主要3種水揚量変動

謝 辞

本調査を実施するにあたって、尻労・六ヶ所では柳谷智氏・相坂幸二氏、大間では木戸芳氏、深浦・岩崎では田中裕憲氏に、伝票整理の補助をしていただき、ここで感謝の意を表す。また、各漁業協同組合の方々には、本調査を快く引き受け、ご協力していただいたことに対し、深く御礼申し上げます。

引 用 文 献

- * 1 伊藤 智幸 (1994) 太平洋のクロマグロ資源 月刊海洋No.9,1994 577